



図2 学業不振児のためのテスト・バッテリー

① 知能検査と標準学力検査の活用

一般に学業不振とは、学習能力（多くは知能であらわす）に比して、学業成績が低い場合をさしている。

判断の基準として、

- 成就値（成就値＝学力偏差値－知能偏差値）が－10以下（学者によっては－8以下）の場合。
- 新成就値（新成就値＝学力偏差値－知能対応学力偏差値）が－7以下の場合。

など、成就値を測定して判断することが一般的である。

表3は、知能検査と標準学力検査の結果であるが、学業不振児の発見にあたって、新成就値に注目してみよう。

判断基準から、新成就値が－7以下にある者が該当し、これらをアンダーアチーバーといい（＋7以上はオーバーアチーバー）、学業不振児の一群としてとらえることができる。

表3からは、No.14、No.20の子供が学業不振児として該当している。ここでは、No.14の子供を対象として、学業不振の背景や指導のあり方を明らかにしたい。

No.14の子供は、知能偏差値は65であり、知能段階からみると5に位置し、知能レベルは上位にある。従って、当然、学力水準も高いレベルが期待できるはずである。しかし、4教科の学力偏差値は平均51で、段階でみると3に